

近世・近代遺跡から出土する雪駄の尻鉄について

はじめに 奈良市旧大乗院庭園跡からはD字形の鉄製金具が多数出土している（『紀要2005』ほか）。同様の形態の金具は東京都下の江戸近郊の遺跡からも、まとまった出土事例が報告されることがある。この遺物の機能については、東京都下の各遺跡の報告でも、農具や腰帶の蛇尾など様々な説が出されている。つまり近世遺物の研究が進展した東京都下においても、現在のところ不明とされている遺物といえる。筆者は旧大乗院庭園跡出土資料の形態的特徴を詳細に分析した上で、履物に取り付けられた金具であると推定し、これを伝世品と比較検討した結果、雪駄の裏革の踵に取り付けられた尻鉄であると結論付けることができた。さらに出土品と伝世品の比較検討によって、近代の雪駄尻鉄の型式学的な変遷について初期的な知見を得ることができた。小稿では、これらの概要を報告する。

旧大乗院庭園跡出土のD字形鉄製金具 旧大乗院庭園跡からはD字形の金具が20点以上出土している。下端が孤状のものと直線のものの2種がある。機能は不明とされている。この平面形態がD字形となる金具の特徴は、両端が折れ曲がっている点にあり、これは厚さ2～3mmのものに装着されていたことを示す。またD字形の湾曲部は刃部が付けられておらず。むしろ分厚くなっているものもある。湾曲部は表面とした面の縁辺に直行方向の擦痕が観察される。製作技法は鍛造による半円形の鉄板片を素材として、両端を折り曲げている。折り曲げる前の素材板片も出土している。

江戸近郊出土のD字形鉄製金具 いっぽう江戸近郊でもD字形金具の出土事例がみられる。とくに新宿区西新宿三丁目遺跡（東京オペラシティ建設用地内埋蔵文化財調査団1993）では42点とまとめて出土している。出土場所が近郊農村に多いことと形態から、農具の部品の可能性が指摘されている。同じく新宿区下戸塚遺跡（早稲田大学埋文調査室編1997）では7点出土しているが腰帶の蛇尾として報告されている。このように江戸近郊出土資料についても評価は定まっていない。

伝世品との比較による機能の推定 これに対して、京都府立総合資料館に収蔵されている吉川觀方コレクションの

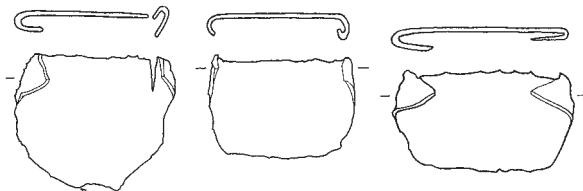


図69 旧大乗院庭園跡出土のD字形鉄製金具 1:2

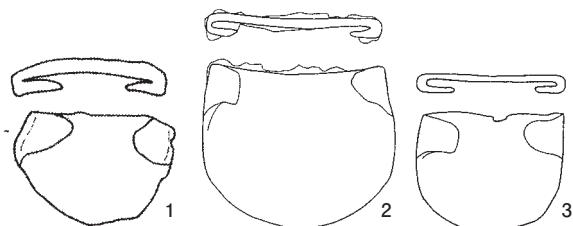


図70 西新宿三丁目遺跡(1)・下戸塚遺跡(2・3)出土資料 1:2

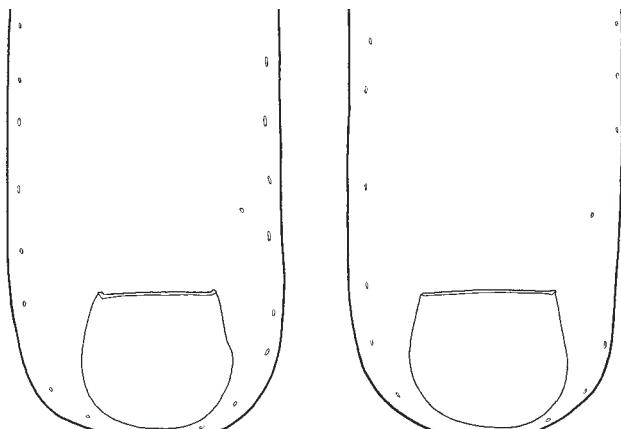


図71 近世雪駄の尻鉄（吉川觀方コレクション）1:2

江戸後期製作と伝えられている伝世品の雪駄の踵をみると、平面形態および、製作技法が類似する金具が付けられる。D字形の湾曲部が肥厚しており、これは踵の擦り減りを防止するためであろう。伝世品の裏革の厚さはおよそ2～3mmであり、旧大乗院庭園跡出土品の両端の折れ曲がり部の厚みとほぼ対応する。これら伝世品との比較により、近世・近代遺跡から出土するD字形鉄製金具は雪駄の尻鉄である可能性を指摘したい。

近代尻鉄の型式学的変遷案 近代になると尻鉄は急速に形態変化を起こしたようである。以下に吉川觀方コレクションの伝世資料をもとに、近代における尻鉄の形態変遷について型式学的な予察を述べる。

はじめに近世資料と同じ形態だが、より大型のものが作られる（図72-1）。差し込み部が溶接されたものであり、近世資料と形態が同じでも製作方法が異なる。

その後、踵の擦り減りを防止するために、湾曲部が分厚くなるものも作られる（2）。

湾曲部のみを三日月型の鉄製とし、それ以外を硬い厚革でつくり組み合わせるものもみられるが（3）、これは後続するものであろうか。前段階の肥厚した湾曲部のみが集中的に擦り減り、低い部分は機能的に鉄でなくとも問題なかったため、三日月形の部分のみが鉄製として残ったのであろうか。

最後に、湾曲部の三日月形の鉄製の部分を留めていた鉄の部分のみを鉄製とし、それ以外を硬い厚革にするものへと変化する（4）。これも三日月形の尻鉄を留める鉄鉢が集中的に擦り減るため、三日月形の部分が鉄製でなくとも問題なかったためであろう。現代の尻鉄には型式学的にみて、この鉄鉢の頭が三角形や馬蹄形に装飾的に変化しているものもみられる。

このように近代の雪駄の尻鉄は、「全体が鉄製（1・2）」→「踵の縁（三日月）のみ鉄製（3）」→「鉢のみ鉄製（4）」という3段階の変遷がある。これらが一部併存しながら形態変化を遂げたか、あるいは順次発生したのではないだろうか。また、洋靴の影響を考慮すべきであろうか。

以上のように、踵の擦り減り防止という点は機能が一貫して維持されるが、鉄製の部分が小型化していくという形態変化のプロセスが想定される。近代化にともない舗装道路が普及し、これに対応するために転倒防止や軽量化が原因となっているのではないだろうか。

おわりに 最後に近世の風俗誌で雪駄の尻鉄についてみてみると、『守貞漫稿』には雪駄尻鉄の地域差や取り付けられた時期などが記載されている。元禄年間から尻鉄が付けられるようになり、これ以降は尻鉄がついている草履のことを雪駄と呼ぶようになったとある。また京阪の雪駄の尻鉄（図73-1）は江戸のもの（2）と比べると大きいこと、時代が下るにしたがって、尻鉄は小型化する傾向があることなどが記載されており、考古学上重要な記載として注目される。今後は、全国の雪駄の尻鉄の出土資料を比較し、近世における時期変遷や主産地における形態差について検討を進める予定である。

さらに、『守貞漫稿』には大阪と江戸の雪駄直しが描かれているが（図74）、その中に役所の雑用に就きながら、余暇に市中へ雪駄直しに出かける江戸の雪駄直しの例が紹介されている。これに加えて雪駄の生産と流通史（畠

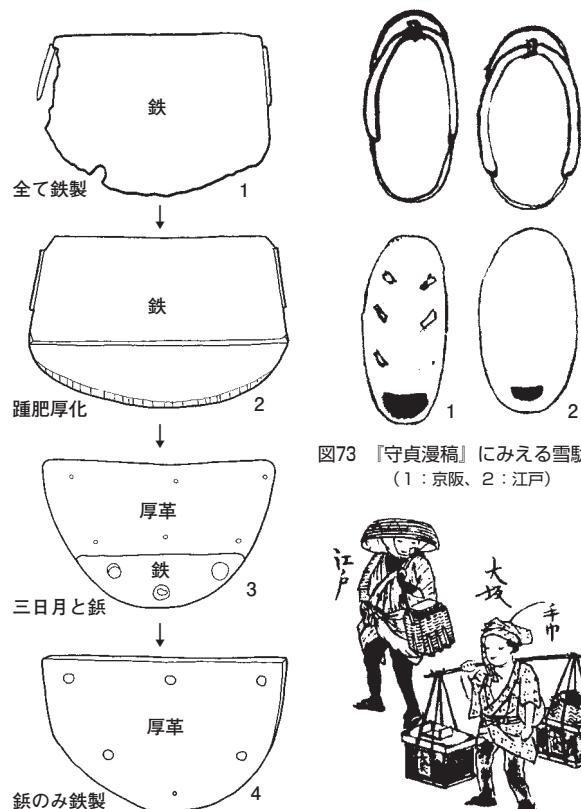


図73 『守貞漫稿』にみえる雪駄尻鉄
(1:京阪、2:江戸)



図72 近代尻鉄の変遷案 1:2 図74 『守貞漫稿』にみえる雪駄直し

中1998) を踏まえ、旧大乗院庭園跡にて雪駄尻鉄がまとまって出土した歴史的な意義について、今後検討を進める予定である。

（国武貞克／文化庁）

謝辞 D字形鉄製金具が履物に取り付けられていた可能性を考慮するに至ったのは、奈文研考古第一研究室長だった難波洋三氏の示唆による。ほかに旧大乗院庭園跡の当該資料を報告され、近世遺跡の類例をご教示くださった富山大学の次山淳氏、京都府立総合資料館所蔵の吉川觀方コレクションについてご助言くださった福山市日本はきもの博物館の市田京子氏、同コレクションの実測調査を快諾してくださった京都文化博物館の洲鎌佐智子氏、以上の方々に記して感謝申し上げる。

引用文献

- 朝倉治彦編『合本自筆影印 守貞漫稿』東京堂出版、1988。
- 東京オペラシティ建設用地内埋蔵文化財調査団『西新宿三丁目遺跡』、1993。
- 次山淳「旧大乗院庭園の調査—第374次 その他の遺物」『奈文研紀要2005』
- 畠中敏之『雪駄をめぐる人びと』かもがわ出版、1998。
- 早稲田大学埋蔵文化財調査室編『下戸塚遺跡 中近世編』1997。